

浄瑠璃素人講釈 ^{はなくらべい、昔ものがたり} 競伊勢物語 ^{ありつねものがたり} 三段目切 ⁽¹⁾ 有常物語の段

杉山其日庵

〈出典：岩波文庫『浄瑠璃素人講釈（下）』岩波書店、平成16年11月〉

この外題は、初代⁽²⁾土佐太夫、即ち播磨大⁽³⁾掾と、初代鶴沢⁽⁴⁾寛治が書下しを語ったと云い伝えられておれども、この説は庵主には分からぬのである。安永四⁽⁵⁾〔一七七五〕年末の八月に（大正十五年を距る百五十二年⁽⁶⁾前）、豊竹島太夫座⁽⁶⁾において、島太夫と春太夫とが一日代りに勤めた⁽⁷⁾と聞いたが、こちらはソーであるらしく思う。作者はちょっとマダ調べが付かぬ。何でも興行師某⁽⁸⁾と丸本には書いてはあるが、確実な事が分り次第更⁽⁸⁾に書く事にする。庵主は、竹本大隅⁽⁸⁾太夫がこの段を語るのを始めて聞いて、身に沁むほど面白味を感じたが、その前明治二十七〔一八九四〕年三月の末に、大阪文楽座にて、竹本撰津大掾⁽⁹⁾（二代目越路）と豊沢広助〔五代〕とが演ずるのを聞いた時は、マダ聞く力も付かぬ時ではあったが⁽¹⁰⁾、その有常⁽¹⁰⁾の品位と、琴歌の面白さと、母親の詞遣い⁽¹⁰⁾の面白さとは、今なお忘るる事が出来ぬのである。

庵主は元来、この段は碌⁽¹⁰⁾に稽古をして貰った事も、語った事もないけれども、この段の風格が好きで、今でも無理に語れと云われるれば、とやかく通⁽¹⁰⁾る位は出来るつもりでおる。それ位にこの段が好⁽¹⁰⁾で、研究したのである。また、大掾、大隅の語るのを聞いた時から、その中で覚えている事を、忘れぬために少しばかり書いて置くのである。

先⁽¹⁰⁾ず要諦⁽¹⁰⁾だけを云えば、

- 一、この段の枕⁽¹⁰⁾は、豆四郎⁽¹⁰⁾と信夫⁽¹⁰⁾との忠臣貞女⁽¹⁰⁾が二人とも、死ぬ事を概括⁽¹⁰⁾した文句故、ごくごく浸み込むように陰気に語る事。
- 二、母の詞遣いは、田舎詞の中に無邪気⁽¹⁰⁾、正直と云う一つの品合⁽¹⁰⁾を語る事。これが加減物にて、なかなかむつかしく、この詞が語れねば外⁽¹⁰⁾の人形の詞がサッパリ立たぬ事になる事。
- 三、信夫の詞遣いは、往昔⁽¹⁰⁾は「幽霊詞⁽¹⁰⁾」にとまで云い伝えられた事もあった由にて、心に始終怖気⁽¹⁰⁾を持って、絶望の中に、夫に対する愛情⁽¹⁰⁾を失わぬように語る事。
- 四、有常の詞遣いは、品のある中に強い処⁽¹⁰⁾があつて、「変り⁽¹⁰⁾」に能く気を付けてサラサラと修行⁽¹⁰⁾する事。
- 五、豆四郎は大抵、太夫の才覚⁽¹⁰⁾で語ってよいとの事である。

大掾の語った時に、「アレかゝさんあんな事云ふてじやわいな、サ、よいわいの」と云った時は、見物は皆顔見合せた事が、今に残っている。その詞の盛り方は、口で云うのでは、何べん云つても云える物ではない。腹の中にこの段を呑込み⁽¹⁰⁾、信夫の一杯の心持⁽¹⁰⁾にならねば、決して云われぬ事である。

「ドウしてそなたの、さればいな」から、信夫の詞は、何らの怖気⁽¹⁰⁾もない、当然の事をして来た⁽¹⁰⁾と云う心持の詞遣いの中に、恐ろしい気合⁽¹⁰⁾が聴衆に移らねばならぬのである。

「ア、有がたし有がたし」からの豆四郎の詞は、時代に「変る⁽¹⁰⁾」のである。

「云ふに云はれぬ身の料を、隠す心ぞいじらしく」と語る時は、この乙女心を思い遣って、聴衆一般に、云い得られぬ、引締りが付かねばならぬ。

大隅が語る時、「ホ、今宵の中にお供して、此所を立退く所存」を締った小声で云って、「がコレ、そなたは母に勘当受キや」と叫んだ、その腹組と声は、当時聞いた人は誰人も心根に徹するほど記憶しているであろうと思う。

大掾が語る時、「振上は上ながら、心の内は神仏、赦してたべと心願祈願」と云った時は、モウ目が血走っていた。また、「ホ、ウ、不孝を尽し愛想尽かされ、親子の縁を切らずんば、母への孝は立まじと、立出る紀の有常」と云ったその声は、常でない遠ざかったような声であった。

大掾も大隅も、「アイと返事はしながらも、親と夫の憂別れ」と語る時は、庵主の耳には、慥かに浄瑠璃を離れていたと聞えた。それでこそ他の外題に比較する物もないほど、琴歌が悲愴になったのであると思う。

(初出=大正十四年二月・『黒白』八八号)

注

- (1) 現行の文楽では、「競伊勢物語 春日村の段」の題名で上演している。「競」の字の読みは、初演時の番付では「はなくらべ」。
- (2) 正確には二代。
- (3) 竹本播磨大掾(?~一八二九)。三代竹本政太夫に入門、竹本加太夫、二代土佐太夫を経て、文政三(一八二〇)年から播磨大掾を名乗り、翌四年から紋下欄に名前がのる。文化・文政期に播磨大掾はこの段を四回勤めている。
- (4) 初代鶴沢寛治(生没年不詳)。初代鶴沢友次郎に入門、宝暦十(一七六〇)年寛治と改名。島太夫や二代此太夫を弾き、初代鶴沢文蔵と人気を二分した。寛政中期まで活躍し、文化年間に没したらしい。
- (5) 初出は「四月」。
- (6) 「競伊勢物語」は安永四(一七七五)年四月、大阪中の芝居において歌舞伎で初演された。その後すぐに読本浄瑠璃が作られ、同月頃に大阪豊竹定吉座で、引き続き八月に京都豊竹島太夫座で、人形浄瑠璃で上演された。
- (7) 『外題年鑑 安永版』には、「島太夫春太夫相つとむ」とあるだけで、一日代りとは記されていない。
- (8) 明治二十九(一八九六)年三月、稲荷座。
- (9) 五代豊沢広助(一八三一~一九〇四)。三代豊沢広助に入門、豊沢豊之助を名乗り、後に四代広助門下となる。初代豊沢豊助、二代猿糸を経て、明治三(一八七〇)年五代広助を襲名。通称松葉屋。二代団平と並び称される名人で、団平が彦六座へ行った明治十七(一八八四)年以降、文楽座の三味線紋下を勤めた。同二十二(一八八九)年以降、二代越路太夫(後の摂津大掾)の三味線を弾く。
- (10) 「マダ聞く力も付かぬ時ではあったが」の部分は、初出にはない。